

授業を変える

2023. 3. 30

多くの学校の先生方は、自分の授業が今のままでいいとは思っていないことと思う。そこで、よく授業改善という言葉を目にし、耳にする。当たり前すぎて、この言葉を聞いても反応する人はいないであろう。

では、いったいどのくらいの先生方が、自分の授業を改善しているのだろうか。経験を積んでいけば、必ず改善するというものでもない。逆に、改善の意識をもたぬまま経験だけを重ねていくほうがこわい。

どうすれば、授業を改善することができるのだろうか。自分で、1年間、あるいは1学期間、ここに気をつける、こんなことをやると決めて授業改善に取り組む先生がいる。また、数年間にわたりテーマを決めて授業改善に取り組む先生がいる。いずれも大事なことは、こんな授業をしたいという思いやイメージである。

教員になって6年目や11年目あたりに行う研修をきっかけにして授業改善に取り組む先生がいる。自ずと研究授業の機会が増えるため、授業改善には取り組みやすい。だが、同じ機会を与えられたとしても、改善しようとする意識をもった人と、こなしているだけの人とでは、大きな違いが出てくる。

チャンスはあったとして、授業を改善することはできているのだろうか。先生方に、自分の授業を改善したという実感や手ごたえはあるのだろうか。中学校の場合、この点が危うい。小学校もそうだが、毎年、どの中学校でも研究主題や副主題を設定し、研究という名のもとに、授業改善に取り組んでいるはずである。だが、実際のところ、どのくらい成果が上がっているのだろうか。

今年度の野田中学校では、1人2回以上の研究授業を行うこととした。研究授業というと、1人1回という学校が多いと思う。しかし、1回では授業が改善したかどうかはわからない。事後の協議会を開いても、意見は出るのだが、授業をこう改善したほうが良いという話までにはならないことが多い。あるいは、当たり障りなく、その授業のいいところを言って終わってしまう。これでは、せっかくの研究授業の機会が生かされない。授業改善の道のりは遠いと言わざるを得ない。

教員に限ったことではないが、人に言われるのは嫌なものである。誰でも褒めてもらいたいと思っている。人から言われる、せめられる、否定されると考えるか、アドバイスをもらう、助言をいただくと考えるかである。自分の授業を変えようという意識が強い人は、同じことを言われても、それをアドバイスと受け取る。一方、授業改善の意識が弱い人は、せっかくのアドバイスなのに人に言われたととる。そうすると、自分の中に入っていない。アドバイスの中身よりも、人から言われたという意識のほうが勝ってしまう。

教員としての誇りは必要だが、経験だけに頼るようなプライドはいらない。それよりも謙虚さが大切である。アドバイスを聞いて役立てたいという誠実な姿勢が授業を変えていく。